

地域同士の絆を深める復興支援 ～新たな一步を踏み出した「西日本経済協議会」～

北陸・中部・関西・中国・四国・九州の6経済連合会により構成され、オール西日本での意見表明や国政への要望活動を行う「西日本経済協議会」。東日本大震災により東日本地域が大きくダメージを受けた今年、西日本で被災地を、そして日本を支えようという、これまでの「西日本」の枠組みを超えた取り組みへの挑戦を始めている。

西日本全域の発展のために

西日本経済協議会(以下、西経協)は、1965年6月、北陸・中部・関西・中国・四国・九州の西日本の6経済連合会により設立された協議体である。その設立宣言には「西日本全域の調和のとれた発展のために地域間に於ける連繋と協力を図ると共に中央偏重の行政、経済政策に対してもその是正に協力し、その要望を国政に反映する」とある。

設立以来、西経協はその年に西日本の経済界全体として取り組むべきテーマを議論し、決議文として取りまとめ、国政への反映をめざして要望活動等を実施してきた。

これまで取り上げてきたテーマは、「中央・地方行政の合理化・効率化」「(大阪万博を機とした)西日本全体の広域交通網の整備」「本州・四国連絡架橋の促進」「関西国際空港の整備」等、今日の西日本の発展のために必要不可欠なものばかりであった。

また、直近では外国人観光客の誘致をめざし、魅力ある西日本各地を余すところなく効率的に回ることができる「西日本広域観光ルート」の策定事業を進めるなど、今後の西日本広域での産業振興のために必要な施策も打ち出している。

オール西日本での復興支援を

東日本大震災という未曾有の大災害を経験した今年度の西経協の活動は、広域で被災した東日本を支え、オール西日本の経済団体として被災地の復興支援を進める役割を担うこととなった。

西経協では震災発生から約1カ月後の4月8日付で、下妻関経連会長(当時)を本部長とする「西経協震災復興支援本部」を設置、活動を開始した(詳細は次頁参照)。「西日本」の枠を超え、広く日本の復興に寄与するための活動を開始したことは西経協にとって新たな一步を踏み出したといえる。

本年度の総会は、「東日本大震災からの早期復興と新しい日本の創生—西日本からの提言—」と題し、10月6日に石川県金沢市にて開催された。各経済連合会の会長ならびに会員企業あわせて約150名に加え、今回は東北経済連合会(以下、東経連)の高橋会長を招き、被災地の経済団体として、取り組みの現状や今後の展望をお話いただいた。

森関経連会長からは、「東北復興への思いと地域の力・自立性の強化に向けて」と題した代表者発言を行った。西経協の震災復興支援活動の総括を中心に、今後も西経協と

して新たな取り組みを継続していくことを表明した。また、西経協震災復興支援本部(以下、支援本部)の安藤本部長代理(関経連震災復興対策特別委員長)は、支援活動の詳細について報告し、「東北の再生なくして日本の再生はない」という強いメッセージを発信した。



森会長による代表者発言

総会では、①東日本大震災からの早期復興、②災害に強い国づくり、③空洞化回避に向けたわが国の産業競争力の強化、④持続可能な社会を目指した制度改革の4点を柱とする決議を採択し、この決議をもとに、10月18日には藤村内閣官房長官、奥田国土交通副大臣、五十嵐財務副大臣、民主党本部等に要望活動を実施した。



藤村内閣官房長官への要望

西経協震災復興支援本部の活動

支援本部では、まず4月に東経連の坂本専務理事を大阪に迎え、西経協メンバーとの意見交換を実施し、震災直後の状況や課題を伺うなど、現地ニーズの把握に努めた。同時に、東北地方製品の販売促進のために東経連が主催する「BUY東北運動」の広報支援活動を開始した。

5月には、「東日本大震災からの復興に向けた西日本からの第1次提言」を発表。「強力な予算執行・施

策の企画立案等の体制の整備」「福島第一原子力発電所事故の早期収束」「日本の経済活動を西日本で支えていくために必要な対策」「日本ブランドの維持・回復に向けた対応の強化」の4点を中心に政府・関係機関に建議した。

8月には西経協の幹事会を宮城県仙台市内の東経連にて開催。震災から半年が経過した現地の状況を伺い、東経連の取り組みと課題を共有した。合わせて、名取市、仙台市、塩竈市の沿岸部の視察を実施した。

そして9月には3泊4日の日程で、

西経協として初のボランティアバス「西経協号」(「関経連号」第2便)を宮城県南三陸町に派遣、6経済連合会の職員24名が参加した。

来年度からは、東経連や東北地区の行政機関等とともに定期的な意見交換の場を設置し、協働で具体的なアクションを実施することで被災地域の産業復興をより強力に支援する。

西経協は、今回の復興支援を機に、地域同士が連携を深め、産業復興・地域振興を盛り上げていくための土壌として進化していく。

(企画広報部 壺井秀一)

ボランティアバス「西経協号」宮城・南三陸町へ

9月21日～24日の日程で、宮城県南三陸町に向けてボランティアバス「西経協号」を派遣した。7月に派遣された「関経連号」の第2弾として、関経連会員企業社員ならびに西経協各団体職員の40名(男性32名、女性8名)が参加した。

今回の活動では、直接的な津波被害を受けた南三陸町志津川地区の住宅地(海から約1.5kmの地点)にて、津波により堆積した土砂中の埋没物を「木材」「金属」「ガラス」等に仕分けする作業に従事した。現場からは住宅廃材のほか、子供服、靴、流されてきた漁船の甲板や漁に使用する網、

プラスチックケースなども掘り起こされ、津波により生活や産業のすべてを失ってしまった被災地の現状を体感することとなった。

また、宿舎(南三陸ホテル観洋)では、女将の阿部憲子氏から、混乱した震災直後の現場での判断・指揮・対応の経験、南三陸町の復興に向けた思いなどをご講演いただいた。

メディアを通じてだけでは伝わらない被災地の姿を参加者が各企業・団体に持ち帰り、今後の支援活動にフィードバックさせていく。



直撃した台風により冠水した道路



がれきが残る南三陸町中心部



阿部憲子氏による講演



現場での活動の様子



西日本各地から参加したメンバー